
安部公房全作品

8

安部公房全作品S

定価 700円

印刷 昭和47年11月15日

発行 昭和47年11月20日

著者 安部公房 (あべこうぼろ)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京808 電話(03)260-1111

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 大口製本

© 1972, Kōbō Abe, Printed in Japan

乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

安部公房全作品 **8** 目次

燃えつきた地図 5

無関係な死 213

人魚伝 237

時の崖 275

カーブの向う 287

子供部屋 311

安部公房全作品 8

燃えつきた地図

都会——閉ざされた無限。けっして
迷うことのない迷路。すべての区画に、
そっくり同じ番地がふられた、君だけ
の地図。

だから君は、道を見失っても、迷う
ことは出来ないのだ。

《調査依頼書》

依頼事項は、失踪人の行方動向。失踪人の氏名、根室洋。性別、男。年齢、三十四歳。職業、大燃商事販売拡張課長。当人は依頼人の夫であり、六カ月前に失踪したまま、連絡を絶ちました。調査に関する一切を信任し、必要な資料の提供をお願いします。

右依頼いたしたく、料金相添え申込みます。なお、報告に関する秘密は厳守し、他に漏洩したり、悪用したりしないことを誓います。

昭和四十二年二月二日

依頼人氏名

根室波留

印

T 興信所人事調査部長殿

クラッチを踏んで、ギヤを低速に入れかえる。二十馬力の軽自動車には、この勾配は、いささか負担が大きすぎた。道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう、十センチほどの間隔で細いみぞが刻んである。しかし、歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない。せつかくざらつかせたコンクリートの面も、ほこりや、タイヤの削り屑などで、すっかり目をつぶされてしまい、雨の日にゴム底の古靴だったりしたら、さぞかし歩きにくいことだろう。これは多分、自動車のためを考慮しての舗装なのだ。十センチごとの目地の刻みも、車のためになら、あながい役に立つのかもしれない。融けかかった、雪やみぞれが、道路の水はけを悪くしているようなとき、水分を側溝に誘導してやるのになら、なんとか効果も期待できそうである。

もっとも、そうした配慮のわりには、車の数はすくなくかった。歩道がなかったせいもあるが、買物籠をさげた四、五人の女たちが、道幅いっぱいひろがって、話題の奪い合いに余念がない。軽くホーンを叩いて、女たちの間を通りぬける。同時に思わず、急ブレーキを踏んでいた。ロー

ラー・スケートを尻にしいた少年が、警笛の口まねをしながら、とつぜんカーブの向うから現われ、すべり降りて来たのである。

左手には、急勾配で切石を積み上げた、高い擁壁があった。右手は、形ばかりの低いガードレールと、小さな側溝をへだてて、ほとんど垂直にちかい崖になっている。そのガードレールをかかえこむように、横倒しになった少年の、青ざめひきつった顔。ぼくの心臓も、負けずに喉元まで跳ね上り、おどっている。少年を叱りつけてやろうと、窓を開けかけたが、いつせいに注がれた女たちの非難がましい視線に、ついひるんでしまう。やりすごしたほうが無難らしい。下手に彼女たちを刺戟して、少年のかすり傷の責任でも負わされるはめになったりしたら、ことである。こういう際の、集団偽証くらい恐いものはない。立場、上、せめてこのあたりでは、当分ぼくは無傷でいなければならないのだ。

アクセルをふかす。焦げた臭いをたてながら、かろうじて車が動きだす。すぐにカーブにさしかかる。血も流さず、骨も折らず、死にそこなった少年を大げさにとりかこむ、女たちの色彩が、バックミラーの中で横に飛び、かわって画像が消えたあとのブラウン管の表面のような、白い空が

あらわれる。道はいったん、平らになり、そこは丘をけずりとして広げた、バスのターミナルだ。ターミナルには、雨よけの屋根がついたベンチもあり、公衆電話や、夏には花壇になるのかもしれない煉瓦のかこいに並んで、水飲場の設備までがととのっている。そして、そこからもう一度、距離は短い急な坂道になる。すぐ手前に、交通標識なみに黄色く地塗りをした、大きな看板が立っていて、

《許可なく団地内に車の乗入れを禁ず》

つくりの頑丈さといい、わざわざ職人を雇って書かせたらしい字体といい、牙をむき出さんばかりのその意志表示を、ぼくは無視して、一気に坂の残りを駆けのぼる。

するとたちまち、風景が一変した。白く濁った空に、そのままつづいているような、白い直線の道。幅は目測で約十メートル。その両脇の歩道との間に、ちょうど膝くらいの高さの柵でこまれた、枯芝の帯がつづいていて、その枯れ方が一様でないせいだろう、妙に遠近法が誇張され、じつさいには各階六戸、四階建ての棟が、左右にそれぞれ六棟ずつ並んでいるだけなのに、まるで模型にした無限大を見ているような錯覚におそわれる。建物の、道に面した部分だけが白く塗られ、わきをくすんだ緑で殺した、その色分けが、さらに風景の幾何学的な特徴をきわだたせてい

るのかもしれない。この通りを軸に、団地は大きく両翼をひろげ、奥行きよりもむしろ幅のほうが広いらしいのだが、採光のためだろう、たがい違いにずらして建ててあるので、左右の見透しは、ただ乳色の天蓋を支える、白い壁面があるだけだ。

誰も付添い人のいない、赤い乳母車の中で、頭からシートをかぶった赤ん坊が、金切り声をあげて泣いている。銀色に光る変速機つきの軽合金自転車に乗った少年が、わざとらしい高笑いを投げつけながら、寒さに頬を染めてその傍を駆けぬける。見れば、けっこう、人通りもあるのだが、あまりにも焦点のはるかなこの風景の中では、人間のほうがかえって、架空の映像のようだ。もっとも、住み馴れてしまえば、立場は逆転してしまうのだろう。風景は、ますますはるかに、ほとんど存在しないほど透明になり、ネガから焼きつけられた画像のように、自分の姿だけが浮び上る。自分で自分の見分けがつけば、それで沢山なのだ。そっくり同じ人生の整理棚が、何百世帯並んでいようと、いづれ自分の家族たちの肖像画をとりまく、ガラスの額縁にすぎないのだから……

東三号の十二——東は通りの右側の意味、三号は通りに面した手前から三つ目の建物、十二は向って左端の階段か

ら上った、二階の住居を示す数字。芝生の帯の切れ目ごとに、立入り禁止、駐車禁止、と書き並べた札が立っていたが、かまわずその建物の前に車をとめてやる。荷物は、小道具一式をつめた、黒い小型のトランク一つ。縦五十五センチ、横四十センチ、厚さ二十センチ弱……いつでも机がわりに使えるように、表面が固く平らであるほかには、取手の端に隠しマイクをつけ、外からテープレコーダーを操作できる仕掛けがあるくらいで、ほかにはこれと言った特徴もない。強いてあげれば、いかにも使いふるされた感じの、けば立つた人造皮。あとから取りつけた、大げさすぎる四隅の金具。どう見ても行商人の商売道具がいいところだ。この外見は、ぼくの役に立ってくれたこともあったし、逆に邪魔になったこともある。

いきなり、氷の粉のような風が、顔を打つ。鞆を風下の手に持ちかえ、歩道を横切って、狭いひさし以外には何もない、暗い長方形の中に足を踏み入れる。靴音が、空罐をほうり上げたみたいに、階段を伝って、はね上って行く。上下二段に並んだ八個の郵便受け……白ペンキで12と書き入れた下の、セロテープでとめた紙片に、小さく手書きで根室と読める……ゆっくり階段を上って行きながら、そろそろ気持の準備にかかろうか……相手が何を求めているの

か、分り次第、すぐにも要求どおりの役を演じこなせるように……分り切っているようにでいて、あんがい決った型がないのが、ぼくらの仕事なのだ。

黒ずんだ緑色の枠で縁取った、白い鉄の扉。プラスチックの蓋にひびが入った、白い呼び鈴。扉の中心の、ちょうど顔の高さにある、葉書大の覗き穴の布の角が斜めにめくれ上り、鎖を外す音、把手がまわって、まるで一トンもありそうな重々しきで、扉が開かれる。かすかに油が焼けた臭い。ぼくの訪問にそなえて、石油ストーブに火をつけたばかりなのだろう。はじめに、二十度ばかり、つぎに六十度ばかりと、二回に分けて扉を開き、相手は一步退って、両手を前で握り合せる。逆光線なので、はっきりはしないが、予想以上に若い女だ。小柄なくせに、首が長く、ひょろりとした感じで、あとほんのわずか暗かったら、子供と間違えてしまったかもしれない。

名刺を出して、ぼくはひかえめに、銀行員風の自己紹介をする。もっとも、銀行員がどんなあいさつをするか、本物を見たわけではないが、つまり、みじんも疚しさを背負っていない人間だけが出来る、あの自信たっぷりな丁寧さ。べつに相手を安心させるためだけの芝居ではない。ぼくは、

注文を受けてやって来たので、なにも押し売りをしに来たわけではないのだ。ただ、相手と一定の距離を保っておくと思えば、やはりこのやり方が一番である。そうでなくとも、とかく疑いの目で見られがちな職業だ。蛇嫌いに、ことさら蛇の芝居をして見せる必要はない。

女はささやくような、かすれ声で話す。緊張のせいではなく、それが地声らしい。多少舌が短いのか、飴でもしゃぶっているように、ぼくをほっとくつろがせてくれる。この薄暗い玄関での、薄暗いぼくの役目の開幕に。

上ってすぐ左手が、狭い台所兼食堂。その奥が、厚いカーテンで仕切られた、居間兼客間。玄関から見て、右側にあたる隣の部屋が寝室らしい。

居間に入ってすぐのところに、円筒型の石油ストーブが、青い焰の輪をゆらめかせている。中央に、円テーブル。リース模様をプリントした、ビニール製のカバーが、長く床までとどいている。左の壁の半分を、本棚が、あとの半分を、窓が占めている。正面の壁には、多分雑誌から切り取ったのだろう、左と上を同時に見ている女を描いた、ピカソの石版画。一応額縁におさまっているところをみれば、それなりの迎えられ方をしているにちがいない。しかし、その隣には、ピカソの額の三倍もある、フォーミュラ・1

の透視図面。エンジンの一部に、線をひき、赤いボール・ペンの書き込みがある。左の窓ぎわに、三角に仕切った電話機のための棚。反対の、隣の部屋の壁との角には、あきらかに手製と分る、ステレオ・アンプ。スピーカーはその上に、三メートルほどの間隔をおき、直角にまじわる角度で、壁にとりつけてある。これでは互いに音を打ち消し合って、ステレオ効果が相殺されてしまうのではあるまいか。そのアンプを背にする位置に、椅子をすすめられる。一人暮しを弁解しながら、女が茶の仕度でもするのだろう、カーテンを分けて台所に去り、すると微かな風が動いて、石油の臭いが消え、かわりに女が残して行った化粧品臭いがした。

彼女がカーテンの向うに消えると、いっしょに彼女の印象までが、急にかすかに、あいまいになる。ぼくは、こだわる。もう一度、ゆっくり息を吸い込み、タバコの臭いや、男の体臭がしないことを確かめてから、タバコに火をつける。床までとどいている、テーブル掛けの裾をめくって、不安の種になるようなものは何もないことを確かめる。それにしても奇妙ななはなしだ。冬の日暮は早く、そろそろ窓のガラスが色づきはじめているのは事実だが、そうかと言ってまだ電燈をつけるほどの時間ではない。眼をこらせば、

電話の棚の下に落ちてころがっている、黒いサイン・ペンのキャップさえ見分けがつくほどだ。ぼくは、はつきりに、彼女を見たにちがいないのに……すくなくも、テーブル越しに、椅子をすすめてくれたとき、ほとんど二メートル足らずの距離で、正面から顔を合わせたはずなのに……こうもいきなり、印象がぼやけてしまうというのは、なんとしても腑に落ちない。ぼくも、この道に入ってから、もう四年半だ。とくに意識しなくても、見たものの特徴を反射的にとらえ、その場で似顔絵にしてみたいこみ、必要に応じて取出し、すぐに復元するくらいの習慣は出来ている。たとえぼさっきの、ローラー・スケートの子供なら……外套は、切返しのある幅広の襟がついた、紺のラシャ地……襟巻はグレイの毛糸……靴は白ズックで、眼尻が下り、髪は固くたまばら、額の生えざわはほとんど一直線、鼻の下が赤くただれていた。さいわい急なぼり坂で、ブレーキが利いてくれたから、よかったようなものの、もし勾配があの半分で、ぼくの車の馬力があと二倍もあつたら、いくらハンドルを切つても、もう間に合わず、少年は車をさけようとして体を左にねじり、ねじるためにのびした右脚を、向うから車輪の下に押し込んで来ていたにちがいない。脛が碎けるくらいなら、まだました。ローラー・スケートで接地

抵抗を失っている少年の体は、車輪に触れた部分を軸にして、大きく外にふりまわされ、頭からもろに、ガードレールに叩きつけられていたはずだ。頭蓋骨が破裂するほどではなくても、首の骨ぐらいいは折れていたことだろう。目をひきつけ、口や、耳から、まぶしいほど鮮やかな朱色の血を、あぶくといっしょに噴き出しながら……そして、いま、当然のことだが、ぼくがここに居ることもなく……

カーテンの向うの、コップの音……あれはしかし、瀬戸物の音ではなく、ガラスの音だ……こんな季節に、まさか冷たい飲物でもあるまいに……それとも、何か、アルコーン分でもふるまってくれるつもりなのだろうか？……まさか、そんなことはありえない……これから始まろうとしているのは、程度の違いこそあれ、いづれやりきれない愁嘆場なのだ……おそらく、番茶いっぱいの仕度だって、もどかしいくらいに気持でいるにちがいないのに……ひっそりとした女の気配……蛇口から流れつづける単調な水の音……ふつうなら、一刻も惜しんで、まくし立て、カーテン越しだろうとかまわず、喋りつづけ、訴えを聞いてもらうこと自体になぐさめを感じている病人なのだからと、承知しながらも、つい相手を制して、費用の相談などで水をさし、憎まれ役を買って出すにはいられなくなるものなのだが……

思い出せない女……手品みたいに、カーテンのひと振り、顔を消してしまった女……それほど没個性的な顔をしていたのだろうか……しかし、服装は、隅から隅まで、百項目以上にして並べてみせることだって出来るほどだ。その服をとおして、体の輪郭を思い浮べることだって、不可能ではない。やせているというほどではないが、均整のとれた、しなやかな肉づき。肌も、たぶん、きめが細かく、しかし色はそれほど白いほうではなく、背中、脇には、うぶ毛がはえているような感じだろう。背筋のくぼみは深く、まっすぐにのびている。年のわりには——そう、最初に逆光線で見るときよりは、ずっと女くさく、成熟していたの、は言うまでもないが——それにしても、なんとなく少年っぽい体つきが、大きからず、小さからずの乳房で、うまくまとまりをつけられていて、激しく体を動かす、最新流行のダンスでもさせたら、よく似合いそうだ。そこまで想像できるのだから、想像をもう一歩すすめて、その体の上にもっとも似つかわしい顔立ちといえ……

想像だけから、おしはかれば、輪郭のはっきりした、表情筋の動きも大きい、よく目立つ顔立ち……と、無理にデッサンを試してみるのだが、やはり上手くない……なにやら淡い、かすかな壁のしみのようなもの——そばかす

かもしれない——が浮んでくるだけだ……しかし、顔をとびこして、髪のなら、思い出せる……黒いなりに細い、櫛のとおりにくそうな毛を、長くたらし、明るい額の左半分をふんわりと隠し……窓の明りを受けて、頭の周辺に金属的な光がまつわりついていたのは、おそらく油をつかつていないせいだろう……明るい額……そう、広くて艶のある、おでこ……そこまで辿り着けているのに、わけが分らない……もしかすると、彼女は、意識的に表情を読みとられることを避けていたのではあるまいか……それとも、あの短い時間のあいだに、五つも、六つもの、まるつきり違った表情を、同時に見せていたのだろうか……なにか、含むところがあつて……だとすると、こいつは、思ったよりも裏のある、油断のならない仕事かもしれない……彼女が台所にひっこんでから、もうおつけ三分だ……急に、じらされる思いで、二本目のタバコに火をつける……火をつけながら、席を立ち、テーブルをまわつて、窓ぎわに立つ……

ガラスの一枚一枚は小さいが、アルミの枠なので、見はらしはいい。コンクリートの敷石をならべた、十メートル幅の歩道をへだてて、正面は東二号の北側の壁。暗いのつぱりとした壁面に、非常階段があるだけで、窓はない。す

ぐ左下に、さっきの大通りが、かなりのところまで見とおせる。ガラスに顔をよせると、駐車してあるぼくの車も見えた。窓の左端、本棚ぎりぎりまでよると、車道の向う側は坂のすぐ手前まで視界がとどき、隣の建物の角の線と約三十度の角度でまじわっているの、歩道の見とおしは、二号館の向う端あたりまでが限度である。

その視界の斜線と、ぼくの車の間あたりで、とつぜん水銀燈が、狼狽気味に点滅した。たぶん、自動点滅装置の、どこかが狂つて、とくべつ敏感に作動したのだろう。しかし、たぶん、もうそんな時刻なのだ。さっきとは見違えるほど、通行人の数が増え、それも買物帰りの女たちだけでなく、勤めを終えて家路につく男たちのほうが目立って来ている。バスが着いたのかもしれない。こうして、上から見下ろしていると、人間が歩く動物だということがよく分る。歩くというより、引力と闘いながら、内臓を入れた重い肉の袋を、せつせと運搬している感じだ。誰もが帰ってくる。出掛けた所へ、戻ってくる。戻ってくるために、出掛けて行く。戻ってくるのが、目的のように、厚いわが家の壁を、さらに厚くて丈夫なものにするために、その壁の材料を仕入れに出掛けて行く。

だが、ときたま、出掛けたつきり、戻ってこない人間も

「それで、心当りは？……なんでも、思いついたことを、端からおっしゃって下さい。」

「それが、駄目なんです。ぜんぜん、なんにも無くて……」

「思いつきでいいですよ。べつに、証拠や裏付けは無くても……」

「そうね……それじゃ、マッチが一つ……」

「なんですって？」

「マッチ箱……半分使いさしの、どこかコーヒー店のマッチ箱が、スポーツ新聞といっしょに、レインコートのポケットに入っていましたけど……」

「なるほどね……」いきなり表情をぬぐい去り、すっかりぼくをまごつかせたその顔を、あらためて見なおしながら、やはり氣にくわない。淡い、微笑がよく似合いそうなその顔は、夫の失踪までを、満足の種に変えてしまったように、ひかえめな平衡のなかで、いやに落着きはらっている。そ

れとも、半年間の絶望と嘆きのはてに、意志を働かせるゼンマイの力が完全にのび切って、あきらめさえ通り越した、放心の底に沈んでしまったのか。もしかしたら、美人だっただかもしれない、その顔立ちも、焦点の合わないレンズを透したように、あるべき位置からずれて見えるのだ。「そのマッチ箱が、もし、なにかの手掛りらしいとお考えなら……」

「べつに……ただ、レインコートのポケットに入っていたので……」

「いいですか、お持ちしたこの依頼書に判をついていただければ、むろん早速にも、調査を開始しましょう。しかし、いまもご説明したとおり、払い込んでいただく着手金というのは、一週間単位の調査費で、一週間以内にご主人を発見できなかった場合、むろん成功報酬はいただきませんが、この三万円をお返しするわけにはいかないんですよ。調査継続の場合は、さらに三万円です。そのほか、調査に要した実費もいたさなければなりませんし……」

「ここに判をつけば、いいわけね？」

「しかし、そんな曖昧な材料だけじゃ、調査のしようもない。こちらは商売だからかまいませんが、みすみす三万円を捨てるようなものじゃないですか。」